

「歩」は力なり

園田勝美[†]（都城地区農業共済組合参事・宮崎県獣医師会）

都城地区農業共済組合家畜診療所は宮崎県の西南部に位置し、秀峰「高千穂の峰」を望む都城盆地にある。

筆者は昭和53年に入組後、34年にわたり家畜診療業務に携わってきてこの4月から現職にある。その間の診療業務の中では数えきれないほどいろんなことがあったが、今回は、NOSAI都城の家畜診療所が誇れるものの一つ「機関誌」の発刊について触れながら、そのことを中心に記して診療所紹介に代えてみたいと思う。

昭和52年、1市5町にあった組合の広域合併に伴い、現在の地に基幹家畜診療所が建設され、それまでにあった中央、三股、高崎、高城家畜診療所の4診療所体制で獣医師17名での船出となった。

当時は、開業の先生方が活躍されていて地域によっては、診療シェアも少なく、昼夜を問わずその確保に向けて走り回っていた先輩の姿も思い出す。一方、新人採用に当たっては地域の獣医師会と相談もされていたようである。

昭和55年に技術向上はもとより、各診療所獣医師が一堂に会し意見交換の場となればという思いから、当時の基幹診療所所長の提案で研究会「三金会」が発足したように記憶している。その1年半後、機関誌「歩」の創刊号を発刊することとなる。

創刊当初は、編集委員が各獣医師に400字詰め原稿用紙を届け執筆依頼するところから始まり、執筆者は、下書きをしてから原稿用紙に書き写し、図表があると別用紙に書いて、「行間のこのあたりに挿入」などと書いて提出していた。誤字や訂正があると、マウス操作ではなく消しゴムを使っただけの作業で執筆も大変であった。

生原稿を集めたものの編集委員の作業も一苦勞であった。原稿を回し読みしながら、各人が赤字で校正していくと最後には、赤字の赤字にもチェックが入ったりして委員同士で大笑いしたことも覚えている。

今では複雑な図表も人によっては簡単にできるようであるし、訂正も指先一本でいとも簡単にできて、最初の頃とは雲泥の差である。

毎年3月の発表会では、若手、中堅、ベテランまで幅広く、発表スタイルもパワーポイントあり、準備が間に合わず口頭での報告など自由な雰囲気の中で行われ、夜は反省会と診療所の活力源ともなっているようである。

昭和57年の創刊以来、毎年欠けることなく発刊され

て今年3月に32号が誕生した。症例報告、調査研究、講習会レポート、随想、実績報告など内容も多様であるが、全員が参加し皆で作る「歩」。

この中から発表した内容が、農林水産省経済局長賞、全国農業共済協会賞、日本臨床獣医学会賞など数々の栄光として残っている。

獣医師の意見を発信し続ける「歩」。これからも継続していくこと、これが再雇用3名を含む28名獣医師のチームワークを旗印に掲げNOSAI都城家畜診療所丸の安全航行の指標でもある。

繰り返しになるが「歩」の発表会では、当初のスライド作成がOHPに替わり、今ではパワーポイントでの発表と15年足らずで様変わりしてきた。

診療スタイルも、少頭数飼いの牛・豚の個体診療から、牛については、農家戸数の激減、経営体の大型化などが進む中で、それらのニーズに即した積極的な診療や定期巡回体制を確立させながら生産性向上を図るといった方向へシフトしつつある。また、豚では巡回指導による養豚場全体のマネージメントへと変わってきている。

なお、個々の得意分野を生かし、高い診療技術を県下で共有化するため、組合区域を超えたネットワーク構築がなされつつあるところでもある。

今後も、農家のニーズを踏まえながらNOSAIがかけがえのない存在となるよう、チーム力を最大限発揮して、畜産王国「宮崎」の農業の発展に貢献していくことを願いながら、同時にそれについての報告などで「歩」の内容が一段とグレードアップしていくことこそ「力なり」の意味合いがますます大きくなるものと信じている。

園田勝美

— 略 歴 —

- 1978年 日本大学農獣医学部獣医学科卒業
- 同 年 都城地区農業共済組合入組
- 2013年 同組合参事就任
現在に至る



[†] 連絡責任者：園田勝美（都城地区農業共済組合）